

女子部・男子部高等科、最高学部

オラトリオ「メサイア」より抜粋

武田若菜・佐々木順子・永野馨

高等科生徒以上で「メサイア」に取り組んでから12年が経った。よって高等科以上の在籍者には、「メサイア」経験者は一人もいない。教員の入れ替わりもあり、楽譜の手配から、練習方法、ステージ上の出入りに至るまで、全て一からの準備となった。また、年々音楽会準備のための授業数確保が難しくなっている中で、効率よく、且つ、生徒の心を置き去りにしない練習へと導くことには苦労があった。茨の道を覚悟の上で、高等科・学部以上で演奏する楽曲は、普遍的なテーマであり、時代を超えて愛されてきた宗教曲から選んだ。

I. 準備

まず、抜粋する曲目を決めることから始まった。今回の音楽会では、装飾的な細かい動きのメロスマが多い曲を最高学部のみで、それ以外を高等科のみとし、ハレルヤと終曲を高等科以上全員で、と歌い分けることにした。

高等科のみ	4番、21番
最高学部のみ	11番、22番、 23番
高等科、最高学部、リビング・アカデミー	39番、47番、 48番

プログラムに弦楽合奏の曲を入れるか否か、ソロのアリアを入れるとすればソリストは誰にするのかなど、梅田先生と高等科以上の音楽科教員、弦楽の講師の先生方と話し合われた。全体のバランスを考え、弦楽合奏による序曲とソロ曲を入れることになった。弦楽の先生より「普段教鞭を取っている身近な先生方が歌った方が生徒にも親しみがあって良いのではないか」との意見があり、声楽科出身の教員3人が1曲ずつソロ曲を歌うことにし、チェンバロとオルガンも教員が担当した。このように、音楽会の教員リーダー達が指導するだけではなく、演奏もするという今までにはないスタイルで、「メサイア」に臨むことになった。

II. 目的と経過

毎朝礼拝を守っている私たちにとって、聖書の内容を題材にしたオラトリオを学ぶことは、大きな意味を持つ。演奏会の前の年には学業報告会があったが、女子部では「メサイア」を作曲したヘンデルについて調べたグループがあり、男子部でも報告がなされた。合唱の練習が進んでくると、男女を問わず、作曲者の意図を汲むべく「メサイアの楽譜から気づいたこと」と題して、有志の勉強会が数回開かれ、高等科全員でその学びを共有した。また、牧師さんにいらしていただき、「永遠の命」についてお話をしていただくなど、多角的な学びにより、合唱を深めていくことができた。さらに、一方通行の指導の在り方では限界が見えたため、男子部・女子部のコーラスリーダーたちと教員が共に考え、生徒主体の練習の仕方を模索した。少人数のグループに分け、混声合唱を円になって行うことにより、互いの顔が見え、当事者意識を持つことができた。

練習の過程では、2年がかりで取り組むことが必ずしもプラスには働かず苦労もあった。入学・卒業による生徒の出入りは、練習の進度に大きく影響を及ぼし、前年度の3学期に出来ていたことが翌年度の1学期には出来ないという次第であった。生徒の生活（行事や係、委員の仕事内容）によって授業に出られないことがあるため、週毎に響きが変わってしまうこともあった。そのたびに音楽科教員皆で、どんな解決策があるのか話し合

いを重ねた。オーケストラを囲むように合唱を配置し、お互いを聞き合いやすくなった日、ハーモニーに変化が現れ、梅田先生から「10年待った甲斐があった」とのお言葉をいただき、生徒たちから拍手が沸き起こった。

1. 男子部高等科の取り組み

男子部では、「多様性」という新しい概念の学びが始まり、リーダー4人は個々の違いに寄り添い、同調圧力によらない練習環境を整えたいと考えた。さらに、音楽会の目標を出すか否かにまで神経を注ぎ、「皆で一方向に進もう」と強要する雰囲気を出さなくとも、「やりたくない人」も主体的に取り組める環境づくりに配慮したいという希望があった。しかし、リーダーたちの思いは伝わらず、「やりたくないことから離脱する権利もある」と主張し、「多様性」「主体性」の意味を自分のいいように解釈する生徒も出てきてしまい、その対応に生徒リーダーが苦慮する事態も起きた。教員が介入する道もあったが、ぶつかり合いが学びのチャンスであることをリーダーたちと共有し、生徒間で話し合うことになった。「多様性」に起因したこの問題は、特に高等科2、3年生に影を落とし、本番で一生懸命歌えたにもかかわらず、素直に喜ぶことができなかった。しかし、年度を終える頃には、「自分自身と対峙する主体性」の意味に気づき、「多様性」の意味においても問い直そうとする生徒が現れ、取り組み姿勢に変容を見せていった。

2. 女子部高等科の取り組み

音楽会の目標を決めることになっていた初めてのリーダー会議の席で「目標を掲げると、その言葉に縛られてしまう」と主張する男子部と、目標の必要性を感じている女子部との違いに、リーダーたちは大変戸惑いを感じるスタートとなった。また、女子部の生徒たちの中にも一生懸命取り組んでいる人と気持ちが乗らない人がおり、コーラスリーダーは皆が前向きになれるよう練習の工夫をし、細やかに呼びかけてくれた。その努力が元々協力的な高等科3年生に伝わり、自主的な取り組みの輪は全体にじわじわと広がっていった。

一方で、宗教合唱曲の指揮を専門になさっている福島章恭氏から声の出し方や発音などの指導を

していただいたことで、特にアルトが歌い方のコツを掴み、ハーモニーが美しく響くようになっていった。

3. 学部の取り組み

(1) 授業時間帯の工夫および単位

前回の音楽会の時に「コーラスの授業時間が必修教科と重なっていて取れないため、歌いたいが出演できない。」との声を学生たちから聞いた。そこで今年度は、2年生以上の必修授業をコーラスの時間帯に重ならないように、学部の教務課や先生方が時間割を組んでくださり、コーラスを取りたい学生が選択できるようになった。

さらに、2年生以上で選択履修した学生は、通年で2単位取れるようにご配慮頂いた。(必修の1年生は通年で1単位)

(2) 外部特別講師によるレッスン

メサイアの練習が進んでくると、より意欲的に学生が取り組むための新しい切り口を模索する必要に迫られた。この時点で、宗教曲を歌う意味について牧師さんから何うことも考えたが、それよりも、キリスト教徒ではないが、宗教音楽の演奏をライフワークとしている福島章恭氏にその魅力についてお話いただくのはどうか、との案が挙がった。結果的には、ご本人の意向により実践指導となったが、宗教曲における発声の仕方や発音などについて大変わかりやすく教えていただき、学生が意欲的に歌うことにつながった。

(3) 男女人数比の問題

いわゆる混声合唱というのは、男女の人数比が、男：女＝1：2でバランスがとれると言われていたが、今回の学部生コーラスは、男性27名・女性17名であり、完全に逆転していた。その上、とても声量のある男子学生が多く、女子学生に発声指導をするだけでは、この人数比の壁を越えることはできなかった。声量バランス調整のため女子部コアグループの高等科3年生5名が学部コーラスに加わることを、梅田先生にご了解頂いた。それによって、男子学生も安心して歌えるようになり、全体の雰囲気が生き生きとしていった。2年生以上の学生は、音楽会のスタッフや就職活動など忙

しい中であったが、積極的に参加することができた。お客様のアンケートの中には「学部生の歌はさすがだった。」との言葉も散見された。

(4) スタッフの仕事内容の工夫

音楽会では例年、学部2年生が主要な係を担っている。「係を担当すると本番の舞台で歌うことができない」という事態をできるだけ避けられるように工夫し、仕事内容を整理した。その結果、舞台監督3名以外の学生スタッフは、メサイア本番に出演することができた。この見直しは大変意味のあることであった。

4.リビング・アカデミーの取り組み

当初、参加曲目は「ハレルヤ」だけであったが、熱心に練習を重ね、生徒さん方のたつての希望により「終曲」も歌うことになった。オーケストラ合わせの時には、指揮者の指示に真剣に答えようとする真摯な姿を見せ、高校生・学部生に大変良い影響をもたらした。

Ⅲ. 本番当日の様子

今回初めて合唱のひな壇にベンチを用意し、自分たちが歌う時以外は座るようにした。ひな壇組みとベンチの設営は、学部生が行った。

リビング・アカデミーの立ち位置について、特に安全面より検討が重ねられた。曲の途中から舞台に出る案や、客席の1列目で歌う案などが挙げたが、最終的には本人たちの希望で、舞台上の最後列にて曲の始めから参加することになった。また、熱中症予防のため、予めペットボトルを座席の下に仕込むことや、段を上がる時には高等科生徒が付き添うことなど、配慮も見られた。

リハーサルでは、男女の境界線を揃えることに時間を多く要したが、見た目にも整っていることは、演奏の説得力に関わることを実感した。

チェンバロとオルガンの調律については、ひな壇組みが一段落した時点で、チェンバロは舞台上、オルガンは楽器庫で行われた。

舞台進行については、学部2年生のリーダー3人と学部教員が担当し、舞台転換はステージ進行

に詳しい卒業生の落合一成さんにお手伝いいただき、椅子並べは男子部中等科2年の担任と生徒たちによってスムーズに行われた。

演奏は、弦楽合奏の引き締まった序曲から始まり、高等科コーラスによって救い主を与えられる預言が高らかに歌われた。続いて学部コーラスが軽やかにキリストの誕生の喜びを表現した。ソロ曲を挟みながら、集中力を切らすことなく受難の曲を経て終曲へと向って行った。力強い「Worthy」に続き、「アーメンコーラス」が始まる。バスパートの柔らかな響きに各パートが重なっていき、「永遠の命」を思わせるハーモニーが会場を包み込んだ。

練習では、常に指揮者に依存していた合唱であったが、本番では梅田先生の指揮によって各自の力が引き出され、歌うこと自体を楽しみ、生き生きとしたハーモニーを生み出すことができた。

Ⅳ. まとめ

自由学園の音楽教育には、羽仁両先生の「芸術教育なくして本当の人間教育はできない」との思想が反映されている。

生徒たちは、梅田先生と2年間に渡り「メサイア」に取り組んだことで、音楽に妥協なく向き合っておられる先生の姿勢から「本物に触れる」学びを得られたことであろう。

また、音楽専用の本格的なコンサートホールで演奏することによって、残響時間や、建物の材質上の違いから生じる豊かな響きを味わい、その中で演奏できる喜びを感じられたにちがいない。

終曲「アーメンコーラス」の最後の「アーメン」という言葉がホールに響きわたり、それに続くお客様の盛大な拍手は、高みを目指して努力を重ねたことの証として、一人ひとりの心の中に生き続けていくものと信じている。

資料1 合唱曲の楽曲分析

メサイアを演奏するに当たって、有志の生徒と楽曲分析を行った。それを、全体に共有した際のスライドが以下の表である。歌詞になっている聖書の抜粋部分と単語と音楽における拍の関係などがはっきりと対応していることを認識するきっかけとなった。

1

メサイアの楽譜より
気付いたこと

2018年11月
女子部 行場 結佳 石丸 文香
男子部 木村 翠
男子部教諭 高田 貴

5

1 4番 聖書の出典箇所と訳との対比

And the glory of the Lord shall be revealed, and all flesh shall see it together,	主の栄光がこうして現れるのを肉なるものは共に見る。
for the mouth of the Lord hath spoken it. (Isaiah 40:5)	主の口がこう宣言される。(イザヤ書 40章5節)

赤：強拍の音節
新共同訳より

2

展示の内容

- 歌っている言葉と音楽の関係 4番、21番、39番、47番
- メサイア全体の構成と歌う曲の関係
- 4番 (And the glory)の特徴
- 21番 (Surely)の特徴
- 39番 (Halleluja)の特徴
- 47番 (Worthy)の特徴
- 48番 (Amen)の特徴
- 参考文献

6

1 重要単語と拍子のアクセントの一致

21 Surely he hath borne our griefs の場合

4拍子の構造

Surely, su-re-ly he hath borne our griefs and car-ried our sor-rows

3

1 重要単語と拍子のアクセントの一致

音楽では、その文章の意味の大切な単語のアクセントと、拍子における強拍が基本的に一致していることを確認しました。

7

2 1番イザヤ53章4、5節

歌の歌詞 Surely He hath borne our griefs, and carried our sorrows. He was wounded for our transgressions, He was bruised for our iniquities; the chastisement of our peace was upon Him. (Isaiah 53:4~5)	彼が担ったのはわたしたちの病、彼が負ったのはわたしたちの痛みであったのに、わたしたちは思っていた神の手にかかり、打たれたから彼は苦しんでいるのだ、と。彼が刺し貫かれたのはわたしたちの背きのためであり、彼が打ち砕かれたのはわたしたちの咎のためであった。かれの受けた懲らしめによってわたしたちに平和が与えられ、彼の受けた償いによって、わたしたちはいやされた。
---	---

青：聖書で歌になっていない所

4

1 重要単語と拍子のアクセントの一致

4 And the glory of the Lord

3拍子の構造

And the glo-ry, the glo-ry of the Lord,

8

重要単語と拍子のアクセントの一致

47番 Worthy is the Lamb that was slainの場合

4拍子の構造

Wor- thy is the Lamb that was slain,

拍をずらして強調

9

47 ヨハネの黙示録5章12、13節
歌の歌詞
Worthy is the Lamb that was slain,
and hath redeemed us to God by His blood
to receive power, and riches, and
wisdom and strength,
and honour, and glory, and blessing.
Blessing and honour, glory and power,
be unto Him
that sitteth upon the throne and unto
the Lamb,
for ever and ever.
(Revelation 5:12~13)

天使たちは大声でこう言った。
「屠られた子羊は、力、富、知
恵、威力、誉れ、栄光、そして、
賛美を受けるにふさわしい方で
す。」
また、私は、天と地と地の下と
海にいるすべての被造物、そし
て、そこにいるあらゆるものが
ここのうのを聞いた。
「玉座に座っておられる方と子
羊とに、賛美、誉れ、栄光、そ
して権力が世々限りなくありま
すように。」
音：聖書で歌になっていない所

14

21番 (Surely) で気づいた曲の特徴 (1)
2回繰り返される言葉
“Surely” (確かに)
“He was bruised” (彼は傷つけられ
た)
“The chastisement” (体罰)
を繋げるとこの曲の要約になる。

10

4番 (And the glory) で気づいた曲の特徴 (1)
同じ節がパートごとに異なったタイミン
グで歌われる。(対位法)



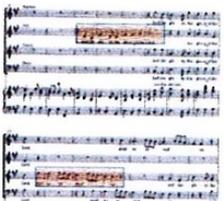
15

21番 (Surely) の特徴 (2)
全体として、悲しい曲だから、
淡々と述べられている。
あまり派手な飾るメロディ
ではなく、また、旋律の繰
り返しが他の曲より少ない。
(12-13小節、16-17小節
の冒頭、19-23小節が旋律
を追いかける構造になって
いる。)
12、13小節の冒頭



11

4番 (And the glory) の特徴 (2)
最初に新しい言葉が
表れる時は、
単独のパートではっ
きり歌詞が聞き取れ
るようになっている。



16

21番 (Surely) の特徴 (3)
1~11小節と20小節以降は、事実を直
接表しているような節に対し、
12~20節は、反省をしているように感
じる節になっている。

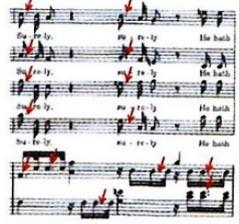
12

4番 (And the glory) の特徴 (3)
“revealed (現れる)” の言葉には、長い節
がつけられて強調されている。



17

21番 (Surely) の特徴 (4)
付点のリズムが多く
使われていて、
これは、勇ましさで
はなく、
ムチ打ちや、罪の激
しさの方が多いのだ
と思われる。



13

4番 (And the glory) の特徴 (4)
テーマが終わるところでは、リズムが倍の3拍になっている構造
がある。(「ヘミオラ」とよばれる。)



18

39 Halleluja
Hallelujah! for the Lord God
Omnipotent reigneth.
(Revelation 19:6)
わたしはまた、大群衆の声のよ
うなもの、多くの水のどろろき
や、激しい雷のようなものが、
ここのうのを聞いた。
「ハレルヤ、全能者であり、私
たちの神である主が王となられ
た。」
(ヨハネの黙示録19章6節)

19

39 Halleluja

The Kingdom of this world is become
The Kingdom of our Lord and of His Christ;
and He shall reign for ever and ever
(Revelation 11:15)

さて、第7の天使がラツパを吹いた。すると、天にはさまざまな大声があつて、こう言った。「この世の国は、我らの主と、そのメシアのものとなった。主は世々限りなく統治される。」(ヨハネの黙示録 11章 15節)

24

4 7 番 (Worthy)の特徴 (2)

曲の冒頭の天使たちの合唱の部分では、Largoというゆっくりなテンポで全員でそろって歌いだし、1つ1つの言葉が強調されている。

曲の冒頭部

20

Halleluja
4 8 小節

ここにアクセントを付けない。

25

4 7 番 (Worthy)の特徴 (3)

天使のコーラスのAndanteでも、全員のリズムがそろっていて、1つ1つの言葉がはっきりと強調されている。

21

39 Halleluja

King of Kings, and Lord of Lords.
(Revelation 19:16)

この方の衣と腿のあたりには、「王の王、主の主」という名が記されていた。(ヨハネの黙示録 19章 16節)

26

4 7 番 (Worthy)の特徴 (4)

Bからのあらゆる生き物の賛美では、旋律が重なり合うようにバラバラに歌いだし、だんだん音型が同じになって、Blessingという賛美に向けてエネルギーをためている。

旋律が重なって歌い出す様子

22

キリスト教の世界観と歌う曲の配置

イザヤ書：キリストの生まれる前の預言書
4 And the glory 21 Surely

ヨハネの黙示録：キリストの再臨・神の国の実現
39 Halleluja 47 Worthy

① 先存 ② 受肉 ③ 昇天・高擧 ④ 聖霊 ⑤ 再臨・終末 (神の国の実現)

⑥ 誕生 ⑦ 地上の生 (神の国の宣教) ⑧ 降下 ⑨ 復活 ⑩ 審判

※ 大貫隆「聖書の読み方」を参考

27

48 Amenについて

メサイア全曲で、キリストの誕生の預言、生誕、十字架、復活、再臨というキリスト教の中心について、3部47曲で歌った後、この物語、すべてを受けて第48曲Amen(然り)を歌っている。演奏は、47番に引き続いて行われるが、Amen(然り)という言葉は、全曲を受けている。曲は、ベースから始まる雄大なフーガの形式となっている。

23

4 7 番 (Worthy)で気付いたの特徴 (1)

歌になっていない聖書の部分から、曲の最初からAの終わりまでは、「天使たち」の合唱 Bから曲の終わりまでは、「天と地と地の下と海にいるすべての被造物、そして、そこにいるあらゆるもの」の合唱であることがわかる。

28

参考文献

- Georg Friedrich Händel "Messias" Carus-Verlag, Stuttgart 2009
- 金澤正剛「キリスト教と音楽」音楽之友社 東京 2007
- 新共同訳「聖書」日本聖書協会 東京 1989
- Revised standard version "The BIBLE" American Bible Society New York 1971
- <http://www.geocities.co.jp/Hollywood/9240/Composer/messiahtext.htm> (メサイアの歌詞の対訳)
- 大貫隆 「聖書の読み方」岩波新書 東京 2010

資料2 演奏会後の「メサイア」感想文より

- 音楽会の数日前から、コーラスの練習が始まる前よりも、大きい声で歌えるようになっていきました。それは、練習の積み重ねのおかげなのかなと感じました。音楽会当日では、終わったあとに「楽しかった」「良かった」というクラス人の声が聞こえました。
- 高等科コーラスの時間に徐々に耳が慣れてきて口がまわるようになり、ちゃんと参加できるようになって嬉しかったです。また、私達の学年もメサイア4番に参加したいと積極的に関わっていくことができたのも成長だと思いました。
- 梅田先生に指揮してもらえると、なかなか体験できないこともあり、練習の最後の方は、力を入れて練習できました。本番歌っていてとても気持ちよくて、アーメンコーラスを歌っている時は、もう終わってしまうのかという気持ちになりました。とてもいい演奏ができてとても楽しかった。いい思い出になりました。
- 課題をとおして、メサイアについて知れて良かったです。
- はじめ高音が出なく、コーラスも嫌いでもやる気が出なかったのですが、途中から、家などで練習し、学校でも真面目に取り組んでいたら、高音が出せるようになり、歌えなかった所も歌えるようになり、とても楽しくなってきました。そして、東京芸術劇場で歌えてとてもいい思い出になりました。
- 私が中学との違いを感じたのも当たり前だと思います。中学では技術だけだったからです。学園でそのことを気づかせてくださった先生方や上級生にとっても感謝しています。音楽会を通して、共に創ることの本質を知ることができました。
- まだ音楽会に気持ちが向いていなかったのですが、本番1週間前くらいの練習で、梅田先生が「今歌っているのは、自分たちのためでも先生のためでもない、来てくれるお客様の心に届けるために歌うんだ。」という言葉が、私にはとても強く心に残りました。そしてその時から、音楽会で悔いの残らないようにしたいと思い、真

- 剣に取り組むようになったと思います。(中略) 皆と声を揃えて歌うことの楽しさや音楽によって届けられる感動を学ぶことができ、頑張った良かったと感じています。
- 歌った後の拍手喝采の景色は忘れられないものとなりました。胸をはって舞台に立つことができたのは、今までのコーラスの時間での学びがたくさんあったからだと思います。できたことに感謝します。
 - 東京芸術劇場で歌える！演奏できる！と言って、嬉しそうなクラスメイトを見て、何がそんなに良いのだろうと疑問に思っていましたが、リハーサルでステージに上がった時、はじめて東京芸術劇場で歌うことということが、どれだけすごいことかがわかりました。本番直前の緊張も、歌っている間、楽しくて舞い上がっていたことも、今でも覚えています。達成感があり今までで一番楽しい合唱でした。
 - メサイアは一体感をとても感じました。歌っていて、とても楽しく気持ちが良かったです。練習期間はやる気が出ないこともあったのですが、徐々にしっかり歌えるようになり、普段も口ずさむときもありました。約2年間の練習の成果が本番で発揮されたのだと感じました。(中略) 最終的に、楽しく歌え、満足できたのでよかったですし、大きな舞台で貴重な経験ができた良かったです。
 - 昨年から一生懸命準備をしてきて、皆で創り上げた音楽会は、とても感動的なものになったと思います。私は最初メサイアを歌うということを知った時「難しそうだし、曲数も多いし面倒くさい」と思っていました。しかし、何回も何回も歌っていくうちに、だんだん曲の仕組みも意味も分かってきて、歌うのが楽しくなってきました。そして、どんどん授業も真剣に積極的に取り組むようになっていきました。声の出し方や歌う時の姿勢など、とても勉強になり、興味深かったです。皆で一つのことに取り組むことは、とても楽しいことであるということ、今回、改めて感じることができました。クラスとしても、皆、本番が近づくにつれて、互いに励まし合って取り組んでいたように思います。また、学園全体で交流が深まり、一体感が生ま

れたように感じました。(中略) 皆の努力の成果が、本番で発揮され、感動を生むことができて、本当に良かったなど感じています。素晴らしい経験をありがとうございました。

- 高2になった頃から、周りの人が真剣に取り組んでいるのだから、自分もやってみようと思い、試しに、きちんと声を出して歌ってみました。そうしたら、私語やボーッと過ごしていた時間は、とても長く退屈だったのに、皆の声を聴きあってハーモニーをつくることは楽しく、授業時間があつという間に過ぎるようになりました。(中略) 須田さんのお父さんのお言葉、コーラスリーダーからのお話などを通し、信仰のない私も、客観的に、この曲を理解出来るようになり、さらにメロディーに合わせて詩の状況を思い浮かべながら歌えるようになりました。本番は、仲間がいることと、今までの積み重ねに自信を持つことができ、全く緊張せずにステージ発表を楽しめました。アーメンコーラスの最後のブレスは、皆の心が一つになったのを肌で感じ、歌いながら感動しました。(中略) この音楽会期間で無駄だったことは一つもないと思います。クラスのまとまりという課題が残りましたが、批判し合うのではなく、この音楽会で先生方、リーダーたちがやっていたように、丁寧に丁寧に、広い視野でこの課題と向き合っていたらと思います。来年も大きな音楽会をやりたいなと思う次第です。
- メサイアは楽しみながら、達成感を感じることが出来ました。終わったあとに会場内に響き渡ったあの余韻は今でもまだ頭の中に残っています。音楽会の練習を通して、様々なことを学びました。その中の一つは、大勢の人が心一つにして歌うことです。たくさんの方がいる中で、一つの作品をつくりあげるには、皆の努力と気持ちが大切だと知りました。(中略) 自分の中で本番中にブレスのタイミングなどが揃った時などは、とても嬉しく感じました。練習が時々いやになってしまいいながらも、自分の最大限の力を振り絞ることができたので良かったと思います。
- 梅田先生の常に厳しい指導を受けることで、皆と共通の意識を持って真剣に練習に励むことが

できました。下級生たちの真剣に向き合う姿に自分も学ぶことがたくさんありました。(中略) 基本的に自分一人で取り組むことを好む私にとって、今回の音楽会は皆で協力することなしには成し遂げられない、数少ない貴重な経験だったと思います。そうした中で、私が最も学んだことは「調和するという楽しさ」です。長かった練習期間に比べ、あつという間に終わってしまった本番は、舞台の上で心から楽しむことができました。この二度とない経験をこれからも大切にしたい。

- メサイアの練習が始まり、英語の宗教曲は私は歌ったことがなかったので難しく感じていました。ですが、練習すればするほど上手くなっていき、歌えるようになり、達成感を感じました。(中略) 自分が考えている歌い方や、先生の指揮に合わせて楽しく歌えました。今まで練習してきたことが、無駄ではなかったなと思いました。(中略) 歌の良さをさらに知り、歌を好きになりました。ステージから降りてくる時の達成感を感じ、今までやってきてよかったなと思いました。
- 全員が、音楽が好きで歌うことが好きだったら、何も苦労することはなかったと思います。前向きでない人が少しでもいると、クラスがそっちの雰囲気や飲まれてしまうような気がしていました。しかし、しっかりとやる気を持った人たちは、先生の言うことに耳をかたむけ、言われた注意点は直し、着実に良い方向に進んでいました。(中略) 本番は、一つになれた気がします。生徒の皆だけでなく、東京芸術劇場にいる皆がです。本当に嬉しかったです。
- 音楽会のための毎日のようにあるコーラスは簡単なことではありませんでした。ですが、音楽会がなければ学べなかったことを沢山学ぶことができました。例えば、高等科と学部で歌ったメサイアは、音楽会をやらなければ、きっと大人になるまでわからなかったことがたくさんあったと思います。(中略) 高校生という若い時に、とても大きく、皆のあこがれの東京芸術劇場で、2000人という人々の前で、音楽で、自分たちの気持ちを伝えるということができたのは、本当に貴重な経験だったと思います。最後、メサイ

アが終わってからの皆の拍手や歓声をきいて、音楽の力はすごいと感じました。準備期間や本番で学んだこと、行ったことの意味を忘れず、これからの生活にいかしていきたいと思います。

- ずっと歌い続けてきたメサイアも、暗譜して歌えるし、他のパートの音もわかるようになった。こんなに長い時間をかけて一つのを創り上げたことは、私にとっては初めてに近いものであった。(中略) 弦楽になるとリズムが合わなかったり、一人一人が自分の中に拍をもって流れをつかんで指揮を見ないと、うまくいかないことに気がついた。本番は、皆で楽しく喜びを共有し、聴いている人に想いが届くようにしたいという気持ちが強くなった。どうして私たちは、梅田先生というすごい方に教えてもらっているのだろうと考えたこともあった。(中略) 感動と喜びにあふれた時であった。
- メサイアは、もう本当に凄かった。ホール全体が一つになっていたように感じた。弦楽との音が重なり、男声との音の重なりがきれいで、一つの歌となっていた。これは、みにきてくれた家族に聞いたことだが、学部や先生方のソロのとき、座っている高校生たちが、本当に全然動いていなくてすごかった、と言われた。本番では、自分でも感動するぐらい良いものになったと思うし、周りの人からの激励の言葉がすごく嬉しかった。(中略) 時間をかけてでも、一人ずつ、正しい方向へ、良い方向へと導いていくことが大切だと思う。一人でも変われば、じきに全員が変わる。そうやってお互いを高められるクラスを作れるように、これからも頑張っていきたい。
- 本番では、ステージに立った瞬間から観客の多さに圧倒され、今までにないほど、緊張していました。しかし、曲が始まると、一人ひとりが堂々と歌い、今まで頑張ってきた成果が最大限発揮できていたように思います。歌っている時も座って聴いている時も集中し、疲れていても気合いで乗り越え、全力を出して終えた後の客席からの鳴り止まない拍手を聞き、とても清々しい気持ちでステージから降りることができました。私は今回歌った曲には、一人ひとりの魂が乗せられていたように感じました。この私達

の魂の声が、一人でも多くの方々の心に届き、感動を与えられていることを願っています。

- 練習を頑張っている人が周りにたくさんいることに気づいて、私の意識も少しずつ変わっていったと想います。練習をしていくうちに、全体での歌にまとまりが出てきているのを感じ、それが合唱なんだなと実感しました。
- 合唱を通じて学びが多くあり、本当に良い経験だった。いろいろな人に感謝の気持ちでいっぱい。
- 準備の努力や、「皆の心から表現しよう、楽しもう」という心持ちがあったと思う。そういった点では、自由学園らしい、他にはない「音楽会」が仕上がったと感じた。
- またいつかメサイアを歌えるといいなと思います。
- メサイアの練習は2年前から取り組んできましたが、英語の発音と、キリスト教の解釈が難しく、本番当日ギリギリまで苦戦しました。梅田先生からは厳しいお言葉を何度もいただき、皆、落ち込むこともあったけれど、練習を重ねているうちに、もっと先生のお言葉に応えようと成長できたと思います。私自身の感想は「楽しかった」に尽きます。歌い終えたときにホールに広がった響きや、皆のブレスが揃った瞬間(特にアーメンコーラス)、終わった後の皆の爽やかな達成感に満ちた顔、全てが最高の音楽会でした。練習の苦勞が、あのような形で発揮でき、とても嬉しいです。(中略) 音楽が今までより何倍も好きになりました。もう皆であの舞台に立つことはないけれど、女子部の生活でも、素敵なハーモニーを奏でられる団体になりたいです。